奈文研ニュース

No.73 June 2019

NABUNKEN NEWS

NARA NATIONAL RESEARCH INSTITUTE for CULTURAL PROPERTIES

独立行政法人　国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577　奈良市二条町2-9-1
https://www.nabunken.go.jp

キトラ古墳整備報告書の刊行

『特別史跡キトラ古墳環境整備事業報告書』が文化庁・奈良文化財研究所から３月に刊行されました。奈文研では文化庁のおこなう事業に様々な形で協力しておりますが、本報告書は2014年度まで文化庁文化財部記念物課でキトラ古墳の整備を担当した内田が執筆と編集をおこないました。ここでは報告書の概要として整備事業にいたる経緯や工事の概要、その後の活用について紹介します。

キトラ古墳の壁画は劣化や崩落が保存上の課題となったため、文化庁が2003年に仮設保護覆屋を設置し、翌年から2010年にかけて壁画の取り外しを実施し、逐次修復を開始しました。いっぽう、遺跡そのものについては2005年３月に文化庁が「特別史跡キトラ古墳環境整備基本計画」を策定しました。また、2010年には高松塚古墳壁画およびキトラ古墳壁画の保存・活用をおこなうために必要な事項を調査および研究することを目的として、「古墳壁画の保存活用に関する検討会」を設置し、現在も検討を継続しています。キトラ古墳整備の基本方針は2012年３月の検討会において決定しました。具体的には、①墳丘遺構および墳丘内部の石室の保護を確実にする目的で復旧すること、②発掘調査成果をふまえて２段築成や墳丘北側丘陵部の掘込み等固有の特徴を表現すること、③墳丘および周辺の未発掘地は発掘せずに保存すること、等でした。これを受けて奈文研が基本設計をおこなっています。

石室の閉鎖後、版築による墓道部の埋め戻しは奈文研がおこないました。そこからの整備事業は文化庁が2013年度から2016年度にかけて実施しました。仮設保護覆屋の撤去では一階床面と背面側壁面の一部を遺構の保護と盛土の安定化のために存置しました。墳丘に近接した村道は明日香村が廃止したため、墳丘西側斜面の尾根地形を復旧し、それを迂回する園路を設置しました。墳丘本体部の整備では、遺構保存のための盛土を施し、２段築成を表現しました。なお、テラスの勾配は背面の未発掘部（アゼ）を保存したため、本来的なものよりも大きく表現されています。墳丘表面にはコクマザサを植栽して石室への日射の影響の低減と斜面の安定化をはかり、墳丘および周辺の急斜面地では必要に応じて法面保護工事をおこないました。

史跡指定地内墳丘周辺の環境整備では、周辺の国営公園区域と一体的な利用をはかれるように園路や照明、転落防止柵等の仕様をあわせるとともに、史跡内の多くの針葉樹は伐採し、里山風のクヌギやコナラ等を植栽しました。また、墳丘の近くには標柱、解説板、地形復元模型、乾拓板を設置しました。乾拓板はステンレス板にエッチングの手法を用いて壁画の図柄の残存状況を原寸大で浮き出させ、紙を載せて鉛筆等でこすると図柄が写し取れるものです。

整備後の活用として奈文研は飛鳥歴史公園と共催で、キトラ古墳の遺跡見学＆乾拓体験会を年に４回実施しています。四神の館で整備事業の概要のレクチャーの後、遺跡の見学、７種の壁画の乾拓をおこなって、四神の館に戻り、落款印を押していただき作品を完成させます。普段は四神の館の売店に紙と鉛筆のセットが売られていますのでご利用いただければと思います。　（文化遺産部　内田 和伸）

遺跡見学＆乾拓体験会の様子

発掘調査の概要

飛鳥寺旧境内の調査（飛鳥藤原第197-6次）

2019年１月９日から３月１日まで、飛鳥寺旧境内の発掘調査をおこないました。調査地は安居院本堂の約160m北東にあたり、飛鳥寺の寺域東限を区画する施設の検出が期待されました。

調査区には古代の整地土が全面に広がり、この層の上面では、調査区のほぼ中央に石列１条、東端に石列３条を検出しました。

これより下層では、調査区中央部で柱穴１基と、大量の木屑や木製品などを含む落ち込みを検出したほか、東端の石列の下では柱根が残っている柱穴を１基検出しました。

出土遺物には、調査区中央部の落ち込みから出土した100点以上の削屑を含む木簡のほか、調査区全体から出土した飛鳥寺創建期の軒丸瓦を含む多量の瓦や、円面硯があります。

今回の調査は水路建設工事にともなうものであったため、調査区が限られており、検出した柱穴が南北方向の塀あるいは柵であるのかをあきらかにすることはできませんでした。しかし、２基の柱穴の東西には並ぶ柱穴が確認できなかったことから、飛鳥寺の寺域東限を区画する施設の一部ではないかとも考えられます。

調査区東端で検出した東西方向の石列に重複関係がみられることと、その石列の下で柱穴を検出したことからは、調査地一帯の土地利用が短期間に繰り返しおこなわれていたことがわかりました。

今回の調査によって、これまで調査が希薄であった飛鳥寺東部一帯の古代における様相をあきらかにするための手がかりを得ることができました。

（都城発掘調査部　土橋 明梨紗）

調査区東端の東西方向の石列（北東から）

大官大寺南方の調査（飛鳥藤原第199次）

藤原京左京九条四坊・十条四坊に位置する、大官大寺。６町を占めるこの大寺院は、百済大寺に起源をもつ官寺です。一昨年度より、大官大寺の南方の様相をあきらかにするために、継続的に地中レーダー探査と試掘調査を実施する計画を進めています。

昨年度は、2019年１月と２月に調査を実施しました。試掘調査は左京十一条四坊西北坪、大官大寺の中軸線のやや西側でおこないました。面積は65.5㎡です。また、地中レーダー探査は一昨年度の南側で約10,000㎡の範囲について実施しました。

試掘調査では東西溝１条、掘立柱建物１棟、斜行溝１条などを検出しました。調査区北半で確認した東西溝は幅70cm、深さ25cm程度で、十条大路南側溝の可能性があります。ただし、大路の側溝としては規模がやや小さく、推定位置とも少しずれるなど、確定するにはさらなる調査と検討が必要です。また、調査区南半の斜行溝は弥生時代の流路で、大官大寺周辺の旧地形や遺跡の形成過程を知るうえで貴重な成果です。

未調査地が広がる大官大寺周辺、小規模ながらも地道な調査を積み重ねることで、少しずつ様相をあきらかにしていきたいと思います。

（都城発掘調査部　和田 一之輔）

試掘調査区全景（南西から）

平城宮東区朝堂院の調査（平城第602次）

2018年10月から開始した平城宮東区朝堂院東門の調査では、奈文研ニュースNo.72にて調査前半部の成果、特に奈良時代後半の遺構について報告しました。今回はその後あきらかとなった奈良時代前半の遺構を含めた調査成果について報告します。

調査の大きな目的は、奈良時代前半の東門周辺の解明にありましたが、特に東門の有無が焦点でした。調査の結果、奈良時代前半の東門や区画塀である掘立柱塀の遺構を検出し、奈良時代後半の遺構も含めて、大きく三つの成果をあげることができました。

一つめは、平城宮造営時の整地土や奈良時代前半の東門、区画塀である掘立柱塀の遺構を確認したことです。平城宮造営時の整地土は、厚さが最大約1.5mにも及ぶ大規模なもので、西から東に順に積むようにして埋め立てていました。奈良時代前半の東門や掘立柱塀はこの整地土上に築かれていました。

奈良時代前半の東門の基壇規模は、南北約20m（66尺）、後述の掘立柱塀の位置から推定して、東西は約10m（33尺）であることがわかりました。基壇上には掘立柱の柱穴を合計11基検出し、東門は桁行（南北方向）中央間のみを15尺とし、その他を10尺、梁行（東西方向）を12尺とする掘立柱建物の５間門であることが確認できました。また、掘立柱塀の基壇を東門の北および南で検出し、基壇上に東門北で３基、南で４基の掘立柱の柱穴を確認しました。掘立柱塀の柱は東門の妻柱から、約3.0m（10尺）等間で立てられていました。

これら奈良時代前半の東門や掘立柱塀の基壇は、奈良時代後半にも踏襲され、東門は掘立柱建物から礎石建物へ、区画塀は掘立柱塀から築地塀へと造り替えられたことがあきらかとなりました。

平城宮造営時の整地土（調査区南壁、北西から）

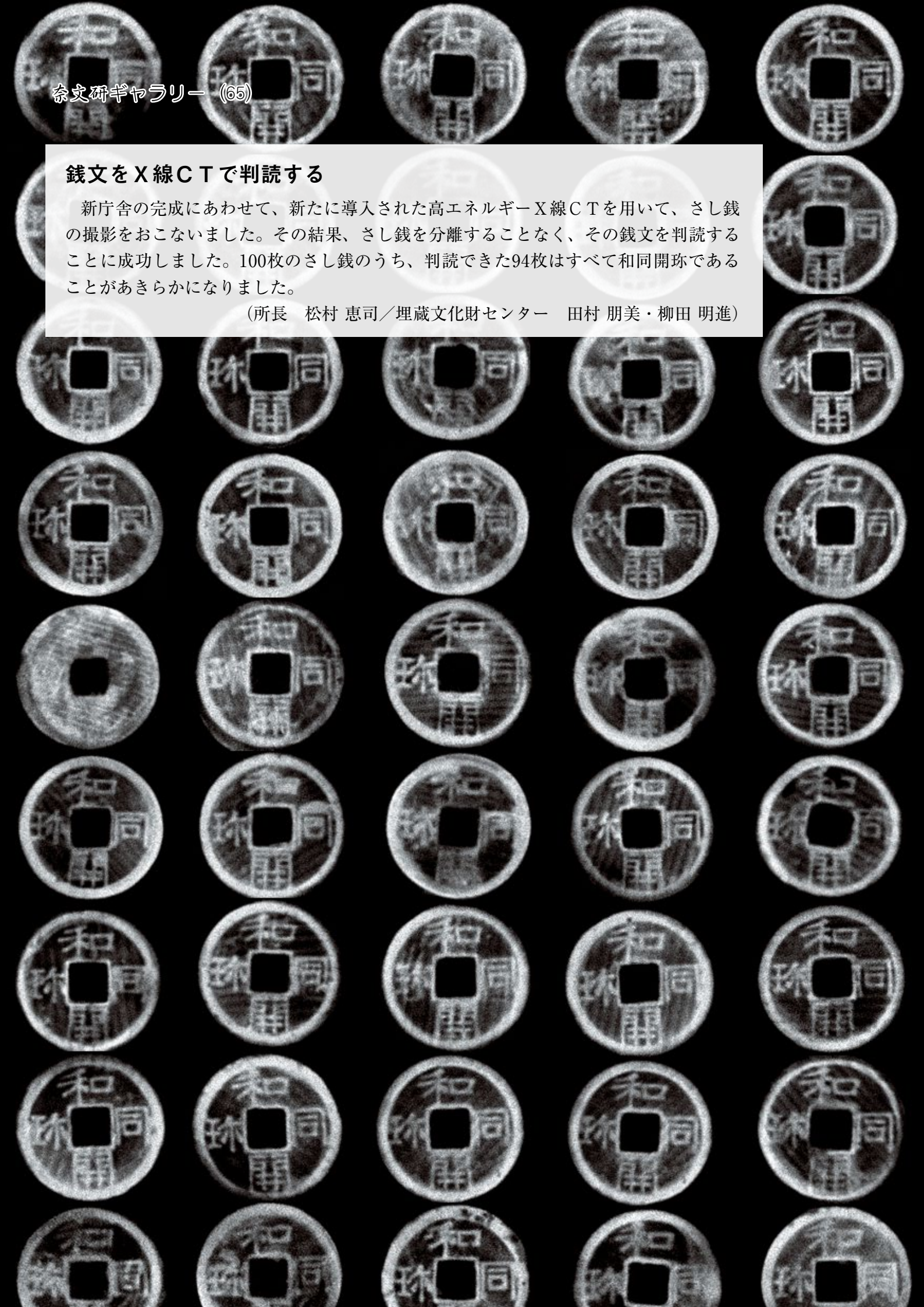
二つめは、奈良時代前半の東門が計画的な建物配置にもとづいていることが判明したことです。東門の桁行全長は55尺になり、この長さは東門のすぐ西に建つ東第二堂と第三堂の建物間の距離と一致します。つまり、奈良時代前半の東門は計画的な建物配置によって建設されていたと考えられます。

最後は、掘立柱塀の遺構から、東区朝堂院の東西規模が確定したことです。東区朝堂院の南北中軸に位置する東門の両端で掘立柱塀の遺構を検出したことから、東区朝堂院の東西幅は約177mであったことが確定し、当時の尺度の600尺（500大尺）で計画施工されていたことがわかりました。そして、奈良時代後半でも東門や区画塀の位置は踏襲されるため、東区朝堂院の東西規模は奈良時代を通じて変化していないことがあきらかとなりました。

これらの調査成果は、東区朝堂院の造営計画や藤原宮から長岡宮にかけての朝堂院の変遷を知るうえでも非常に重要な成果といえます。東区朝堂院の発掘調査はこの調査をもって一区切りとなりますが、隣接する東方官衙地区やその先にある東院地区の調査はこれからも継続します。東区朝堂院との関わりも想定されるため、今後の調査もどうぞご期待ください。

（都城発掘調査部　福嶋 啓人）

奈良時代前半の東門と掘立柱塀（南東から）



銭文をＸ線ＣＴで判読する

新庁舎の完成にあわせて、新たに導入された高エネルギーＸ線ＣＴを用いて、さし銭の撮影をおこないました。その結果、さし銭を分離することなく、その銭文を判読することに成功しました。100枚のさし銭のうち、判読できた94枚はすべて和同開珎であることがあきらかになりました。

（所長　松村 恵司／埋蔵文化財センター　田村 朋美・柳田 明進）

滋賀県日野町宮ノ前遺跡出土「さし銭」

8世紀と考えられる土坑状の落込みから出土した、土師器甕のなかから発見されました。 100枚の銭が「さし銭」の形で甕に納められていたと考えられています。

日中学術交流に参加して

2018年、奈文研と中国社会科学院考古研究所は友好共同研究議定書を交わしました。これは1991年以来の共同研究を発展したもので、議定書に基づき2019年２月25日から３月27日まで中国に滞在しました。

中国では北京の考古研究所を主滞在地とし、鄴城工作站や洛陽工作站に出向きました。鄴城では2012年から継続調査中の鄴南城発掘現場を訪れ、昨年着手した内裏中枢部で検出された壮麗な玉石敷道路遺構に目を奪われました。洛陽では奈文研も発掘に関わった漢魏洛陽城の出土瓦整理に参加しました。宮城から出土した鴟尾破片の接合作業をおこない、可能な限り復元して撮影しました。また甘粛省へ足を伸ばし文物考古研究所や博物館、敦煌研究院の展示研究施設を実見し、さらに楡林窟や麦積山石窟等この地域を特色づける石窟遺跡にも訪れました。

北京では研究所主催の2019年度考古学研究系列学術講座の第３回を受け持ち、「日本考古撮影：歴史与技術」と題する発表をおこないました。会場には所員以外に首都博物館員や北京大学等の学生も訪れており、具体的な機材や撮影法に関する質問を受けました。撮影のデジタル化は、若手を中心に実践的技術への習得意欲をもたらしているようです。今回訪れた各地の博物館でも、撮影画像から得たデータを3DやVR・ARに用いて展示に還元している例をたくさん目にし、子供達が目を輝かせていました。いっぽうで根本的な撮影技術について改善すべき部分も垣間見え、この間を埋める技術提携で奈文研が果たすべき役割は重要だと感じました。

諸先輩が重ねた友好関係は本交流を通じて強固になると思います。相互の友好と研究の進展に、今後も寄与できれば幸いです。（企画調整部　栗山 雅夫）

巨大磨崖仏と絶壁の桟道－甘粛省天水市麦積山石窟

日韓発掘交流に参加して

2018年９月３日から10月５日まで、日韓発掘交流事業により、国立慶州文化財研究所に滞在し、月城垓子地区および皇龍寺南門周辺の発掘調査に参加しました。日韓発掘事業は2005年より始まり、昨年で14年目となります。

月城垓子地区は、1984年以降継続的に調査が行われており、近年は復元整備を見据えた調査が進められています。私が参加した段階では調査はほぼ終盤になっており、土層観察用に残していた畦の掘削が進められていました。皇龍寺南門周辺の調査は、1976年から1979年にかけて調査され既に整備された部分を再調査するものでした。整備で高さの位置を変えられた礎石の下には当初の根石が良好な状況で残っていました。断割調査を担当し、大ぶりの石で周囲を固め、比較的小さめの石を中央に配置している根石の状況が確認できました。南門と中門との間には両脇に廊状の建物跡が検出されており、非常に興味をもちましたが、滞在期間中には調査は完了せず、今後の調査成果に期待するばかりでした。私の片言の韓国語にもかかわらず、研究員の先生、作業員の方々には、さまざまに考えを汲んでいただき調査を進めることできました。

調査の合間や雨天の際には、歴史的建造物の修理工事や公開活用事例、最新の遺跡整備事例など韓国における先端の文化財保存活用事例を学ぶことができました。韓国においても発掘成果から建造物を復元するような研究が、今後より一層進められていくようですので、今回の交流をきっかけに復元研究においても、さらに研究交流を活発にしていければと思います。　（都城発掘調査部　前川 歩）

発掘調査風景（左が筆者）

受賞・飛鳥資料館の図録『あすかの原風景』

飛鳥資料館では、春秋の特別展ごとに、図録を刊行しています。展示品の魅力が一番伝わる図録をつくりたい、そんな気持ちから、近年は図録づくりにも様々な試みを進めています。

昨年度の春の特別展『あすかの原風景』では、明治期の地図や昭和中期のスナップ写真を展示して、飛鳥の風景のうつりかわりを紹介しました。古い写真や地図のノスタルジックな雰囲気を活かしつつも、地元の人々が地域の魅力を再発見できる図録をつくりたいと考え、デザイナーと議論を重ねました。明治期の地図は、美しい色彩や明細筆による細かい文字などの、当時の職人達の手しごともとても味わい深いものです。こうした魅力を最大限活かすために、あえて本の形を正方形に近づけ、古地図の風合いを感じる紙を使って印刷しました。地図の鮮やかな色彩を図録でも再現するために、微妙な明るさや色味についても、明日香村が所蔵する実物資料と見比べながら調整を重ねています。

図録の表紙は、地域の「起爆剤」にしたいとの気持ちもこめて、あえて強めの色味のデザインとなっています。当初はボール紙を使う案でしたが、明日香の風景がもつ温かさや懐かしさなどの雰囲気にあう新バフン紙を採用しました。

『あすかの原風景』の図録は、こうした工夫が評価されて「第60回全国カタログ展」（主催：一般社団法人 日本印刷産業連合会／フジサンケイビジネスアイ）にて、日本製紙連合会賞を受賞しました。飛鳥資料館のこだわりの図録は、飛鳥資料館・平城宮跡資料館の売店のほか、六一書房のオンラインショップで購入できます。ぜひご覧ください。

（飛鳥資料館　西田 紀子）

図録『あすかの原風景』

キトラ古墳壁画が国宝へ

2019年３月18日の文化審議会において、重要文化財キトラ古墳壁画を国宝に指定するよう答申が出されました。キトラ古墳は、７世紀末から８世紀初頭に造営された小さな円墳です。石室の内部には全面に漆喰が塗られ、大陸風のモチーフを題材とした極彩色壁画が描かれていました。このような古墳壁画は、国宝高松塚古墳壁画を含めて国内では２例しか発見されていません。

キトラ古墳の石室には、東西南北の壁面に四神や十二支が、天井に天文図、日月像が描かれており、陰陽五行思想にもとづいた世界観が表されています。石室内における壁画の全体構想が判明する点が極めて貴重であるといえます。また、天井に描かれた天文図は東アジア最古の例とされています。

特筆されるのは南壁に描かれた朱雀です。朱雀は四神の一つとして南方を守護すると考えられている神獣です。高松塚古墳の石室の南壁にも朱雀が描かれていたとみられますが、盗掘の影響で残っていませんでした。日本に現存する朱雀のうち奈良時代以前に描かれたものは少なく、キトラ古墳壁画の朱雀は貴重な遺例です。

壁画は保護のため石室から取り出され、10年にわたる修理作業を経て、現在はキトラ古墳壁画保存管理施設に保管されています。奈良文化財研究所は文化庁の委託を受け、管理や運営、公開事業に協力しています。私たちはこの仕事に携わりながら、貴重な文化財を確実に将来へ伝えていきたいと考えています。

７月20日から８月18日まで開催する「キトラ古墳壁画の公開（第12回）」では南壁を展示する予定です。ぜひ、この機会に実物の朱雀の壁画をご覧ください。

（飛鳥資料館　中田 愛乃）

キトラ古墳の壁画 朱雀

飛鳥資料館　夏期企画展　「第10回写真コンテスト 飛鳥の古墳」

巨石が積み重なる石舞台古墳や美しい極彩色の壁画が描かれた高松塚古墳やキトラ古墳など古代の高い土木技術を示す飛鳥の古墳。しかし、飛鳥の古墳の魅力はこれだけではありません。

瑞々しい棚田の中に横たわる古墳。子供達の声が響く公園に整備された古墳。飛鳥の古墳は、人々の暮らしや農村の景色にとけこみ、飛鳥ならではの情景をつくりだしています。

第10回の写真コンテストでは「飛鳥の古墳」をテーマに、古代の歴史と現代の景観が一体となった飛鳥の魅力を写した写真を公募し、応募作を展示します。飛鳥の古墳の新たな魅力を写真でお楽しみください。　（飛鳥資料館　西田 紀子）

応募締切：７月１日（月）必着
写真展示期間：７月19日（金）～９月１日（日）　休館日：月曜日（月曜日が休日のときは翌平日）
※８月12日（月・振休）、８月13日（火）は開館
来館者投票期間：７月19日（金）～８月18日（日）
開館時間：９：00～16：30（入館は16：00まで）
ホームページ：https://www.nabunken.go.jp/asuka/　お問合せ：☎0744-54-3561

平城宮跡資料館　夏のこども展示「ならのみやこのしょくぶつえん―土の中の花鳥風月―」

奈良のみやこ“平城京”。そこに住んでいた人々や地方からやってきた人々は、いったいどんな木々や草花を目にし、めで、何を想ったのでしょうか？

空想上の平城京植物園の四季折々のようすを万葉集等や、遺跡から出土する木簡、瓦等の考古遺物、タネや花粉等の自然遺物等をてがかりに考えてみたいと思います。

この夏、奈良国立博物館で開かれている「いのりの世界のどうぶつえん」展とともに、親子そろって古代の人々の自然観に触れてみませんか？そこには、現代人の私たちにつながるものがあるはずです。　（企画調整部　加藤 真二）

The Summer Exhibition for Children at The Nara Palace Site Museum
Gardens in the ancient capital of Nara：The unearthed natural beauty
平城宫遗址资料馆 夏季儿童展《平城京植物园: 发掘出的花鸟风月》
헤이조궁유적자료관 여름 어린이 전시회《헤이조쿄 식물원: 발굴된 화조풍월》

会　　期：７月20日（土）～９月１日（日）　休館日：月曜日（月曜日が休日のときは翌平日）
開館時間：９：00～16：30（入館は16：00まで）
ギャラリートーク・ワークショップ：７月26日、８月９日、16日、23日（いずれも金曜日）　各回14：30～（予定）
ホームページ：https://www.nabunken.go.jp/heijo/museum/　お問合せ：☎0742-30-6753（連携推進課）

■　お知らせ

「奈良の都の木簡に会いに行こう！ 2019」（日本学術振興会　ひらめき★ときめきサイエンスプログラム）

みなさんは木簡（もっかん）を見たことがありますか？　今年も「奈良の都の木簡に会いに行こう！」を開催します。平城宮跡にある研究所で、夏休みの１日を木簡とともに過ごしてみませんか？　詳しくは、奈文研のホームページ（https://www.nabunken.go.jp/fukyu/event2019.html#scienceprogram）をご覧ください。

日　　時：８月21日（水）・22日（木）（同一プログラムで２回おこないます）
募集人数：各日とも20人（締切７月26日。応募多数の場合は抽選になります）
対　　象：小学５・６年生、中学生（保護者同伴可）
申　　込：日本学術振興会のホームページ（https://www.jsps.go.jp/hirameki/index.html）からお申し込みください

■　記　録

文化財担当者研修

○建築遺構調査課程
2019年６月10日～６月14日　　８名

現地説明会

○平城第612次発掘調査　現地説明会
平城宮跡第一次大極殿院地区
2019年６月７日（金）　　180名

第124回公開講演会

2019年６月15日（土）　　149名

編集　「奈文研ニュース」編集委員会
発行　奈良文化財研究所　https://www.nabunken.go.jp
Ｅメール　jimu@nabunken.go.jp
発行年月　2019年6月